

琉球大学学術リポジトリ

[資料] 渡名喜島におけるジオツアーの試行

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 泰人 メールアドレス: 所属: 浦添市立仲西中学校
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017716

渡名喜島におけるジオツアーの試行

田代 豊*・伊藤 泰人**

(* 名桜大学国際学群・** 浦添市立仲西中学校)

I はじめに

琉球列島には日本本土と異なる自然環境のもと、特徴的な地形地質が存在し優れた自然景観が残されている地域も少なくない(尾方 2009)。その保護のためには、このような地学遺産の価値に対する認識が一般市民の間に今以上に広がることが重要と考えられる(安谷屋 2010)。

近年国内外の各地で、地球科学的に価値のある地域をジオパークとして認定し、その保全と適正な利用を図る取組みが進められている。その一環として行なわれるジオツアーは、科学的観点からのインタープリテーションによって市民に地学教育と自然景観体験の機会を与える。このような取組みは、自然に対する正しい知識の普及と環境倫理に基づいた行動を実践するとともに、新たな観光としての地域振興の側面を持ち、地域のジオダイバーシティの保全のために有益と考えられる。しかしながら、琉球列島では未だ実践が進んでいない(尾方 2010; 高橋・尾方 2010)。

そこで筆者は、琉球列島におけるジオツアーに対する社会的な認知を広げるとともに、その定着に向けた可能性と課題を探ることを目的に、2010年7月に名桜大学公開講座として渡名喜島において一般市民を対象としたジオツアーを実施した。本稿は、その実施内容とツアー参加者に対して行なったアンケート調査の結果について報告するものである。

II 渡名喜島の概要とジオツアー参加者の募集

沖縄島の北西約60kmに位置する渡名喜島は、面積3.46km²でその大部分が沖縄県立自然公園に指定されている。2011年1月1日現在の人口は477人(渡名喜村資料)で島の中央部の低地に集落があるが、北部と南部は急傾斜地が多いため現在は人工建造物や農地がほとんどなく、沖縄島周

辺離島の中で自然景観が多く残されている島の一つである。那覇・久米島間を往復するフェリーが1日1~2便寄港し、これが一般の人が利用できる外部との唯一の交通手段である。数軒の民宿があるだけでホテルやレジャー施設、レジャー関連業者等はなく、観光客数は渡名喜村資料によると平成15年度2,731人とされている。

渡名喜島では随所に特徴的な露頭が観察され、大学等の地学巡検の場として利用されている。このような地形および地質は自然景観としても独特なものであるが、これに着目した観光は行なわれていない。とくに干潮時に海岸線を歩く以外に通行できない北部海岸は来訪者がほとんどいない。今回のツアーでは、以上のような特徴を持つ渡名喜島において、1日目に島の北部半周を海岸沿いに歩き、2日目に南西部の海岸を観察する2日間の行程を計画した。

本ツアーは、以下のような方法によって広報し参加者を募集した。

- ①名桜大学公開講座案内冊子の配布(沖縄島内公共機関および過年度の同講座受講者への郵送)
- ②名桜大学ホームページへの案内の掲載
- ③本ジオツアーの宣伝チラシの配布(沖縄島内公共機関等での陳列配布)
- ④新聞(沖縄県内2紙)および沖縄県名護市報の催事告知欄での公告
- ⑤本ツアー企画関係者知人への個人的な呼びかけ

以上の広報の結果、30代から70代までの幅広い年齢層にわたる30名の参加者があった。このうち男性は18名、女性は12名で、沖縄島在住者が26名、渡名喜島在住者が3名、県内の他島在住者が1名であった。なお、参加者は交通費や宿泊費、食費等を各自負担したが、ツアー自体の参加費は無料であった。

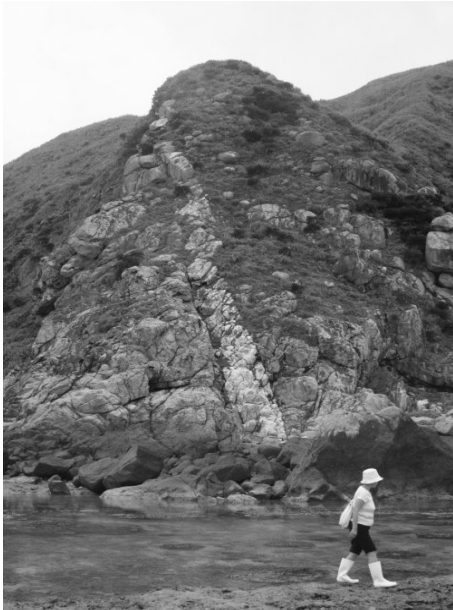


図1 グシクヌムイの貫入岩脈を観察する参加者



図2 シド崎で接触交代鉱床等に関する解説を聞く参加者

Ⅲ 実施したジオツアーの内容

本ツアーは、大潮にあたる2010年7月24～25日に実施した。以下、今回実施したジオツアーの行程と主な観察ポイントについて概説する。

1. ツアー1日目（渡名喜島北部海岸）

出発点となる渡名喜島東部の砂浜（アガリ浜）に正午に集合した参加者に対し、ジオツアーの意図について簡単な説明を行なったのち、1日目のツアーを開始した。なお、この日は干潮時に約2時間半かけて渡名喜島北部海岸を巡った。

1) アカシの2つの岩脈

アガリ浜から海岸沿いに北上すると、間もなく転石の下から岩盤が現われてくる。これは、島の基盤を作る石灰岩にマグマが貫入した岩脈であり、灰褐色のひん岩と白色を帯びた石英はん岩が隣り合って見られる部分がある。参加者は、石英はん岩の後にひん岩が貫入した順序を判別できる岩脈の接触部の形状を観察した。

2) フギミのめがね岩

アカシから更に北上し、尾根筋が海に突き出たところでは、石灰岩が浸食されて特徴的な二重アーチ状になっており、この形から島では「めがね岩」と呼ばれている。これが島の各所で見られる古期石灰岩の一つであることを解説した。

3) アマチチ浜のビーチロック

「めがね岩」の岬を回ると広い砂浜とイノーが見えてくる。この砂浜では、黒色を帯びたビーチロックがよく発達しており、多量の礫が取り込まれている様子を観察した。

4) グシクヌムイの貫入岩脈

アマチチ浜北端の岬はグシクヌムイと呼ばれている。ここでは、細粒閃緑岩の中に花崗岩質マグマが入り込んだアプライト質岩脈があり、ダイナミックな岩脈の貫入状況を観察した（図1）。

5) ナキジンガーの湧水

渡名喜島では地表の水系は未発達だが、各所に湧水がある。グシクヌムイの更に北側にある岬突端と島との鞍部では、ナキジンガーと呼ばれる湧水を観察した。これは、集落から遠く離れた地点にありながらかつて人々に利用されてきた湧水の一つである。

6) シド崎の接触交代鉱床とスカルン鉱物

ナキジンガーを越えると、県内唯一の接触交代鉱床が見られるシド崎に達する。シド崎を離れて眺めると、植生に覆われた閃緑岩と熱変性を受けて灰色の結晶質となった石灰岩（大理石）、その間にドーム上に盛り上がった褐色の接触交代鉱床を見ることができる（図2）。これは、石灰岩に閃緑岩が接触するときに、貫入に伴う熱水のはたらきによって形成された鉱床で、特徴的な珪酸塩鉱物であるスカルン鉱物が見られる。シド崎では、転

石の間に散在するザクロ石，自形水晶，ヘデンベルグ輝石，磁鉄鉱などを観察した。

7) シド崎のダブルノッチ

シド崎で見られる石灰岩は，上述の「めがね岩」と同じく古期石灰岩であり，ここでは熱変性のために結晶質になっている。この岬の先端付近では，明瞭なダブルノッチを観察した。

8) サカシ崎の巨岩群

サカシ崎では，古生層の粘板岩と砂岩などの巨岩が海岸に立ち並ぶ景観を観察した。

9) 屋内でのレクチャー

1日目の野外行程終了後，参加者を屋内会場に集め，当日のツアーでの観察内容の振り返りと渡名喜島の自然一般に関する解説，およびジオツーリズムに関する基本的な解説を行なった。

2. ツアー2日目（渡名喜島南西部海岸）

2日目は，午前8時から渡名喜島南西部海岸沿いの道路を歩き，タカタンシの円錐カルストと貫入岩脈，ユブク浜のチャート，ナガバラ崎のドロマイト質石灰岩を観察した。那覇へ帰るフェリーの出航時刻に合わせ，午前10時にツアーを終了し解散した。

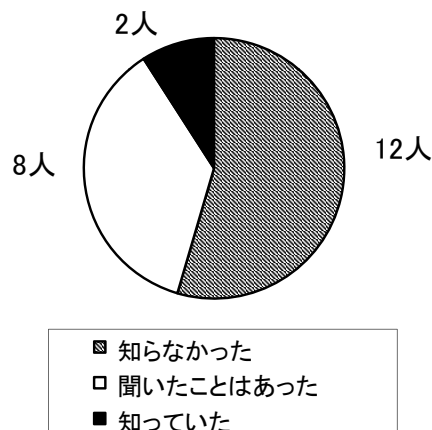
IV 参加者に対するアンケート結果

1日目の野外行程終了後に行なったレクチャーの際，今回のツアーに関するアンケート調査を，質問票を配布して実施した。30名の参加者中22名から回答を得ることができた。

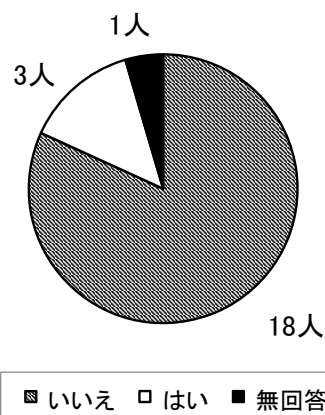
回答者の職業は様々であったが，無職（6名）が最も多く，ついで会社員（4名），団体職員（3名）の順であった。回答者の14名は沖縄島中南部に居住し，それ以外は名護市（5名），渡名喜村（2名），久米島町（1名）に居住していた。講座を知ったきっかけは，新聞や広報誌の告知欄が最も多く（7名），次いで知人からの紹介（6名），公共施設に置かれたチラシ（5名）が多かった。

このような参加者のうち，ジオツアーやジオパークについて詳しく知らなかった人は半数以上を占め（図3a），また，実際にジオツアーや地学巡検などに参加したことがなかった人が大多数を占めた（図3b）。一方，ジオツアーやジオパークにつ

a. 「ジオツアー」や「ジオパーク」について、以前から知っておられましたか？



b. 過去に、ジオツアーや地学巡検など、地形や地質の観察を主題としたイベントに参加したことがありますか？



c. たとえば渡名喜島のような場所で有料の半日程度のジオツアーがあった場合、1人いくらぐらいまでならガイド料として支払ってよいと思われませんか？

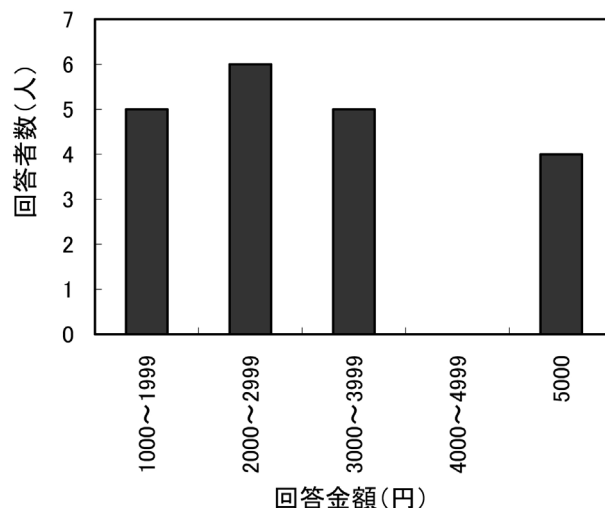


図3 参加者のアンケートに対する回答

いて「聞いたことはあった」と回答した人も比較的多く、参加者には普段からこのようなことに何らかの関心を持っていたが実際に参加する機会に巡り合っていなかった人が多かったものと考えられる。さらに、回答者全員が今後ジオツアーに参加したいと回答し、ジオツアーが多くの人に魅力的なものであることが示された。また、渡名喜島において半日程度のジオツアーを有償で催行することを想定し、それに対するガイド料金として支払える金額を尋ねたところ、1,000円から5,000円の範囲内の回答が出され、平均額は約2,700円であった(図3c)。運営方法を検討することにより、渡名喜島におけるジオツアーを有償のツアーとして実施できる可能性があると考えられる。

さらに、参加者に渡名喜島の自然の中で印象に残ったものを尋ねたところ、ジオツアーで観察・解説した島の地形や岩石などを回答する人が多かった。とくに「貫入岩脈」や「接触交代鉱床」というような専門用語を具体的にあげる人も複数あり、今回のツアーによって科学的な観点から自然を理解する意義を伝えられたと考えられる。

V おわりに

今回のツアーで観察したように、渡名喜島では特徴的な地形および地質が徒歩で巡ることのできる範囲内に多数存在し、その多くが印象的な自然景観を形成している。この島はこれまで研究者や学生に地学巡検等教育研究のフィールドの一つとして知られていたが、このような自然条件は、この島が一般市民を対象としたジオツアーの対象地としても優れた地域であり、同島に残されている自然の重要性を示唆するものである。

IV章に示したように、今回のジオツアーは参加

者に好評を博し、市民の地球科学に対する関心や知識の普及に貢献できたものと考えられる。これは、ジオツーリズムが琉球列島において市民に自然への深い理解に基づく楽しみ方を広める意義を有することを確認するものである。また、多数の参加者が集まったことは、地学的事象に関心を持つ人々によるジオツアーに対する潜在的な需要が、沖縄において小さくないことを示している。とくにアンケート調査の中で有償でのツアーに対しても多くの人が参加希望を表明したことは、学術的知識を持ったガイドの養成などによって、地元住民による観光産業としてジオツアーが今後発展する可能性を示していると考えられる。

一方で、今回対象とした渡名喜島以外にも、ジオツアーの対象となりうる場所は琉球列島にまだまだ残されているはずであり、そのようなジオサイトの発掘と評価、各サイトに適したジオツアーのあり方の模索が必要であろう(安谷屋 2010)。今後、ジオツーリズムの理念を実現する企画が多くの島々で生み出され、多くの人々が参加して知識と感動を得、琉球列島の「大地の遺産」の価値が広く認識されることが期待される。

文 献

- 安谷屋 昭 (2010) : 宮古諸島のジオパークの可能性を探る. 沖縄地理, 10, 41-47.
- 尾方隆幸 (2009) : ジオツーリズムと学校教育・生涯教育－自然地理学の役割. 琉球大学教育学部紀要, 75, 207-212.
- 尾方隆幸 (2010) : 琉球列島におけるジオパーク活動(第1報). 沖縄地理, 10, 49-50.
- 高橋 巧・尾方隆幸 (2010) : 「ガンガラーの谷」ガイドツアーとジオサイトとしての可能性. 沖縄地理, 10, 35-40.